

写真1 「岩見八重葎」の中の鴨山(鴨島)の図

はじめに

島根県益田市には歌聖とされる万葉の歌人柿本人麿(人麿呂)に関わる口伝がある。それは、人麿が益田の鴨島(山)で没し、彼を奉る神社があったとされる島は、万寿三年(一〇二六年)の津波によって水没したというものである。

江戸時代までは正しいとされていたこの説は、現在は国文学者や歴史学者のあいだで広く受け入れられる説とはなっていないようである。江戸時代に入って契沖(けいちゅう)(一六四〇〜一七〇一)以来の万葉集注約者は、人麿は下級官吏で地方を転々とし石見国で死んだと考へ、賀茂真淵(一六九七〜一七六九)は人麿を中央へ職務の報告に行く「朝集使」と考へた。さらに、斎藤茂吉(一八八二〜一九五三)は、人麿は島根県邑智湯抱の鴨山で疫病で死んだという説を出し、これが現在の定説となっている。

これに対し哲学者梅原猛さんは、一九七三年に人麿の謎をテーマにした「水底(みなそこ)の歌」と題する本のなかで、歌聖と呼ばれる人麿が下級官吏ではなく、身分の高い宮廷歌人であり、権力者の交代によって宮廷を追われ、石見の海で水刑死したという説を展開した。

梅原さんは、主として人麿の辞世の歌「鴨山の岩根し枕けるわれをかも知らにと妹が待ちつつあらむ」の

「水底(みなそこ)の歌」を掘る

—万寿津波発掘調査裏話—

文学部
自然地理学・地域学講座

中田 高



れる福の字の付く五つの寺が建立されてきたようである。

このように、益田平野は万寿津波の発生した時代にはすでに開発がかなり進み、この地域には津波の言い伝えが引き継がれていく素地があったと考えることができる。

言い伝えのなかには、誇張のあまり、とうてい信じられそうにないものもあるが、中には物的証拠を伴うものもある。

五福寺は万寿津波によってごく破壊されたと言えらるるが、福王寺は津波の約百五十年後には元の場所に再建されている。また、安福寺は現在の万福寺に引き継がれ、そこには津波によって流出したとされる流仏三尊と称される仏像が安置されている。江戸時代には、かつての安福寺の境内から十三重の塔が発見され、現在は福王寺の境内に保存されている。この石塔は、朝鮮半島産の花崗岩よりなるもので、当時、この地が朝鮮半島と強く結びついていたことを窺わせる。

このような物的証拠から、はじめは梅原説に懐疑的であった私も、鴨島の水没のことは別にして、万寿津波についてはどうもあつたらしいと考えるようになった。津波があつたか否かは科学的に立証できるはずであり、本格的に津波の調査に参加することにした。

マスコミが宣伝する「ハイテク考古学」

この調査は、テーマが一般の人の興味をひいたことで、テレビ、新聞雑誌などのメディアが取り上げるようになったので目にとられた方もあろうかと思う。この原稿の依頼もその結果と理解している。

津波の痕跡を掘る

また、これによって特に目新しいことがわかったわけでもない。調査になにか新しさがあつたとしても、それは伝説を科学的な目で再検討しようとした点であると思う。もし、発見とされるものがあつたとしても、それは技術が新しくあつたためではなく、着想が新しくあつたと言えるかもしれない。「津波を掘る」というのもその一つであつた。

もし、砂州や砂丘が発達する海岸を大きな津波が襲ったとしたら、海岸付近の砂が多量の海水によって内陸に運ばれ、堆積すると考えられる。このような津波堆積物は、内陸の堆積物とは異なった特徴的なものであろうと考えられる。万寿津波があつたかどうかをはっきりさせるために



写真2 トレンチ発掘調査の現場
右手が海側の砂丘となり、調査をした畑は背後の低地にあたる。

解釈や、そのほかの文献資料にくわえ地元の口伝などをもとに、人麿の地を益田市の沖の日本海にあつたとされる鴨島と考へた。彼はこの説を立証すべく、十五年ほど前に海底調査を行ったが、これという証拠を発見することはできなかった。

この甲い合戦ともいふべき調査が、地元の熱意に支えられて一昨年から実施された。調査項目の一つに津波を起したと考へられる地震の発生源である「海底活断層」調査があり、これに研究仲間が参加するので、私にも手助けにまいということになり、「水底の歌」に関わるようになった。

荒唐無稽な鴨島水没説?

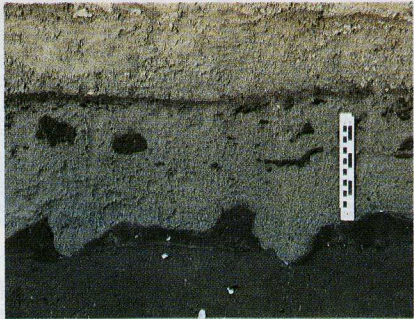
人麿を祭る益田市の柿本神社に古来から伝わると思われる縁起には、「高津の洋に、昔は鴨島といへる大なる島ありて、人丸も是におはせしなり。後一条帝の御宇万寿三年丙寅五月、海上に高浪起て、彼島をゆりこぼちて海中に没せり。人丸御廟に二穂の松とて、名木ありけるが、此浪に根を絶けり。其の後松枝だに神像をかけて、近き浜に打ちよせたり。因て其処に、再び社を建立す。これを松崎と言」と記されているようである。

また、江戸時代の後期に書かれた「岩見八重葎」には、鴨島水没にかかわる記事があり、鴨島の絵地図が載っている(写真1)。

梅原さんは、このような言い伝えやこの絵地図を手がかりに、益田川の河口の沖約一キロメートルにある大瀬を、水没した鴨島があつた場所と考へた。しかし、この絵地図は万

写真3 トレンチに現れた津波堆積物

下部の黒い層は湿地に溜まった泥層で上部は津波によって運ばれた砂層。両者の間は荷重構造(火災状構造)を示す。砂層の中に泥層の破片が混じる。



て運ばれたと考へられる砂が、水分を十分に含んだやわらかい泥の上に急激にのつたため生じたものと考えられ、泥層が上位の砂の中に、ろうそくの炎の先端が横に揺れ動くように突っ込んだ構造(火災状構造)が形成されている。砂層には河口付近にすむ微生物の化石が含まれ、下位の泥層の破片が点々と混入しており、すごい勢いで砂が海水とともに運ばれてきたことを示している(写真3)。

火災状構造を示す泥層最上部の年代は、放射性炭素年代測定の結果、9300 ± B.P. (西暦一九五〇年から九三〇年前)であり、万寿津波の年代と極めて近いことが明らかになった。このような異常堆積を示す砂層は、津波によって流亡したと伝えられる遠田八幡の陸側でも見つかるといふ。伝えの通り万寿津波が益田市一帯を襲ったことがわかる。

「水底の歌」は聞こえるか?

益田市に伝わる人麿伝説のうち、万寿津波の存在はほぼ確実であることが明らかになった。しかし、歴史的・文学的に関心をひく人麿がどのような身分であつたのか、どこでどのような死にかたをしたのかなどは、とても科学的には立証できないことである。

一方、津波で押し流されたといふ人麿を祭る神社がどこにあつたかは、もしかしたらわかるかもしれないとひそかに考へており、その鍵は平野の地形に隠されていると思つている。益田平野をつくる高津川と益田川の旧河道はほとんど平野の東半部に認められ、長い間平野の西半部は入り江や湿地の状態であつたと考へられる。

人麿と益田を結びつける最も古い文献は、一四五〇年頃(万寿津波後約四百年)書かれた「正徹物語」である。これには、「人丸の木造は石見国と大和国にあり。石見の高津といふ所也。此所は西の方には入海有りて、うしろには高津の山がめぐれる所に、はたけなかに宝形造の堂に安置したり」とあり、人麿を祭る神社が平野の中にあつたことを記している。

この地形に関する記載は、平野の微地形から推定した益田平野の古地理とよく一致しており、極めて注目される。将来、平野の中に人麿神社の跡が発見されるようなことになれば、これをもとに人麿伝説研究の新たな展開があるかもしれないが、「水底の歌」が聞こえると言ふところまで到達するには、科学は非力すぎると思つている。

(なかつた・たかし)

津波から八百年ちかたつて描かれたもので、余り信憑性の高いものとは考へられなかつた。地形学を研究している私の目には、この絵地図に描かれた鴨島はいかに不自然に映る。冬の季節風の強い日本海に、波静かな港を持つこのような穏やかな地形を持つ半島があつたとは考へにくいことや、十数メートル以上の高さを持つと思われる山を、一回で水没させるほどの規模の大地震は考へにくいことから、この絵地図は単なる想像の産物にすぎないと判断される。

このような理由から、私は調査に参加するまでは梅原説は荒唐無稽のものではないかと考へていた。また、津波についても信頼にたる古文書が残っていないため、万寿津波は日本被害地震総覧や日本被害津波総覧には記載されておらず、その存在についてはなお不明な点が多かつた。

津波に関する言い伝えと物的証拠

津波が襲った益田平野は、高津川と益田川の河口に発達する沖積平野で、海岸部には砂丘をのせる砂州が発達している。この平野は、二つの川が氾濫を繰り返して、砂州の背後の潟湖を埋立てて形成されたもので、その様子はかつての川の流路である旧河道として残されている。

戦後の耕地整理以前には、益田川右岸を中心に班田収授の制度の施行を示す条里制劃りが認められ、人麿の時代にはすでにこの付近まで平野が広がつていたことがわかる。九世紀の半頃には平野の拡大が進み、砂州から内陸にかけて五福寺と呼ば